デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2021年（令和3年）8月17日（火曜日）（25）

有識者、生態系影響も懸念

船体の早期撤去を

八戸港沖で貨物船が座礁し、重油が流出した事故で、船舶や生態学などを専門とする有識者からは16日、早期撤去の重要性や生態系への影響を不安視する声が聞かれた。

事故では座礁した貨物船がいったん自力で離礁したものの、同港から北に約3・8キロの海上でいかりを下ろしてとどまり、翌日に船体が二つに割れた。

船舶の安全性などを研究する、大阪大の梅田直哉教授（船舶海洋工学）は「船が岩礁などの固形物に乗り上げれば割れる可能性はある」としつつ、悪天候を踏まえれば「一般論として、もっと早くにいかりを上げて、沖に出るべきだった」と指摘した。

沿岸に近いほど、船体が風や波、台風などでまた浅瀬に乗り揚げる懸念があると説明。船内の燃料タンクにまだ大量の重油が残るとみられることについては「残燃料が流れ出る前に漁業施設から離れた安全な岸壁にえい航するなどして撤去し、被害の拡大を防ぐ必要がある」と話した。

1997年に日本海沖で座礁、沈没したロシアのナホトカ号の事故では約6200トンの重油が流出。昨年、インド洋の島国モーリシャス沖で貨物船が座礁した際には千トン以上が流れ出て、環境に影響を与えた。

今回の貨物船の座礁時には、船内の四つのタンクに約1550トンの重油が残っており、うち282トンのタンク一つが破損。ほかのタンクについては現時点で破損が確認されていないが、接続するパイプを通しての油漏れも想定される。

八戸工業大の田中義幸教授（生態学）は、過去の事故でも油漏れが生態系に影響を与えたーとして「重油が植物や生物の細胞や膜に付着することで毒となったり、餌を食べる行動に異常が生じたりする場合が考えられる。海域からの一刻も早い油の除去が必要だ」と警鐘を鳴らした。

（柴田佳弥）

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。